

■ 医師への道

目次

はじめに ー 「なぜ、君たちは医師を目指すのですか？」 ー

- 「なぜ医師を目指すか」という問いの深さ
- 「想像力」と、それを支える「土台」が、答えるためのカギ
- どのような「土台」が必要か
- 自分を見つめ直せば、良い点は必ず見つかる
- 採点者や面接官は、何を見ようとしているのか
- 医師としての未来へ

1 医師の仕事とは ー 社会との関わりの中で ー

- なぜ「医師という職業」を選ぶのか
- 社会とは、そしてそのありさまは
- コンビニエンス・ストアから考えてみる

● 無数の人間の働きと関わりあいがあるが、社会を形づくっている

● 「日常」が一瞬で崩壊するとき

● 医師は「社会の支えの支え」

● 医師の役割 1 - 臨床、研究

● 医師の役割 2 - 終末期医療、啓蒙

● 医師の役割 3 - 予防、教育

2 医師への歩み 何をどのように学んでいくのか

● 医学部での学習とは？

● 主要四分野は「一般教育」「基礎医学」「社会医学」「臨床医学」

● 近年のカリキュラム改革

● なぜカリキュラム改革が必要か

● カリキュラム作りの問題点・細分化と総合化

● 共用試験について

● 卒業後、臨床医を目指す場合

● 臨床医以外の進路・研修マッチングプログラムについて

- 学生生活中に体力面、精神面の充実を
- 心身ともに健康な医師となるために

3 社会から医療界への視線 ー不安と期待とー

- 将来の医療の変化に対応するために
- 将来の医療者としての視点を
- 医療者への信頼感と不信感
- 医療過誤・医療事故について
- 医療事故は必ず起こるもの
- 事故の原因の大半は「単純ミス」
- 医師不足への不安
- 医療訴訟の増加
- お産の「安全神話」の副作用
- 「見えない溝」を深めている、医療側の隠ぺい体質
- 「救急たらい回し」と「救急のコンビニ受診」との悪循環
- 「コンビニ受診」をしてしまうわけ

- 「自分たちで医療を守ろう」立ち上がる市民たち
- 世界をリードする日本の先端医療 1・iPS細胞研究
- iPS細胞の可能性
- 世界をリードする日本の先端医療 2・再生医療
- 世界をリードする日本の先端医療 3・内視鏡技術
- KONISHIKIさんを救った内視鏡手術
- いくら技術が発達しても、人間を治すのは人間

4 いま、医師たちは ー日本の医療現場の厳しい現状ー

- バランスを失った日本の医療
- 医療界の考え方の変化 1・「パターンリズム」の時代
- 医療界の考え方の変化 2・「患者中心医療」の時代へ
- 「インフォームド・コンセント」について
- 「セカンド・オピニオン」について
- 「患者中心」の問題点、「パターンリズム」の長所
- 「医療崩壊」の実態・医師の絶対数不足

- 人事権を失った「医局」
 - 「研修医制度」の副作用・地方病院の医師不足
 - リスクの高い科から医師不足に
 - 産科、外科の過酷な状況
 - 救急医療崩壊の実態
 - 救急現場の問題点・守られていない医療者
- 5 医療崩壊を食い止めるには さまざまな対策案とその効果について
- なにが医療崩壊の悪循環を作りあげているか・医師不足対策へ
 - 女性医師の離職防止、「ドクターバンク」
 - へき地、地方の医師不足対策
 - 医療者の事務負担を軽減する「医療クラーク」
 - 海外からの医療従事者受け入れの問題点
 - 注目される「ナースプラクティショナー」
 - 日本での診療看護師導入実現への動き
 - 「医療人材資源」の有効活用を

- 病院側の先導による地域医療の再生
 - 地域に「やりがいのある環境」を作る
 - 「救急たらい回し」防止への取り組み
 - 「トリアージ」の導入、救急患者を断らない病院体制づくり
 - 訴訟リスクから医師を守る
 - 「医療A D R」・医療側と患者側の直接対話による解決
 - 人間として謝罪することの大切さ
 - 「ヒューマン・エラー」にどう対処するか
 - 産業界での安全対策を参考にする
 - 医療現場で活動する安全のプロ・一人の看護師の涙がきっかけに
 - 事故防止は「整理整頓」から
- 6 将来の日本の医療は？ 1 〔人間中心医療〕という考え方
- 必要なのは「温故知新」
 - 「人間中心」の医療へ
 - 患者を見ていない医師

- 人間の五感で診察をする
- 人の手による診察から生まれる信頼感
- 「若き医師」には何が足りなかったのか？
- 地域に根ざした医療を見直す
- 医師と地域が互いに恩恵を受ける関係
- 都会の開業医の不満
- 町医者・村医者が担っていた「プライマリ・ケア」
- 「信頼関係の好循環」を築ける医師は…
- 「かかりつけ医」の重要性
- 「病気中心関係」から「人間中心関係」へ
- 「統合医療」について
- 伝統医学の世界
- 人間の持つ「自分を治す力」
- 日本は「統合医療後進国」
- 「補完医療」は何を補完しているのか
- 「人間中心治療」・人間そのものを診て、治していく
- 双方の「いいとこ取り」をした医療を

7 将来の日本の医療は？ 2 「医師への道」そして「医師としての道」

- 終末期医療について、その発端
- 人間はどこで生まれ、どこで死ぬべきなのか？
- 日本社会の激変、「職」「住」「誕生」「死」の分離
- 「死」を「病気中心」で扱うか、「人間中心」で扱うか
- 最期を迎えるのにふさわしい環境づくりを
- 医療者たちのためにも「人間中心」のデザインを
- 自宅を「医療の場」として考えてみる
- 医療側も社会へ入り込むようなアクションを
- 「医の倫理」とは？
- 「倫理」とは「人として歩むべき道」
- 医療に伴う倫理的問題
- 「倫理」でなく「道」として考えてみる
- 「医師への道」そして「医師としての道」

はじめに
「なぜ、君たちは医師を目指すのですか？」

● 「なぜ医師を目指すか」という問いの深さ

「なぜ、医師になるのか？」

「どのような医師になりたいのか？」

医師を目指して勉強し、医学部にチャレンジする人なら、両方とも誰もが必ず問われる問いです。

文字にすればごく短い問いですが、しかし一方で大変深いものを含んでいる問いでもある、と言えます。なぜでしょうか。

今この文章を読んでいる君たちの大半は、二〇歳前後の、若者と呼ばれる世代に属している人でしょう。中には社会人を一度経験してから医師へのチャレンジを始めた人もいるかもしれませんが、それでも恐らく人生の半ばを過ぎてはいないでしょう。

冒頭の問いはそんな君たちに向かって、今後の人生の残りの時間をどのように過ごすかについて問いかけているのです。日本人の一生をおよそ八〇年とすれば、二〇歳前後の人にとっては「人生全体の残り約四分の三をどうするのか？」と問われているのと同じことになります。

さらに二〇歳という年齢の中身について考えてみると、まず物心がついて後に思い出せる記憶や知識ができてくるのは四〜五歳からでしょう。そして「人生」や「社会」といったことについて意識が及んでくるのは、たいていは一〇代になって以降という人が多いでしょう。つまり冒頭の問いに答えるためには、これまでの一〇年足らずほどの間に得た知識や経験に基づいて、これからの六〇年ほどの人生をどうするかについて、考えをまとめておかなければならないわけです。

これらの問いに君たちがとまどいを感じ、なかなか答えを見出せないのも、ある意味では無理のないことと言えます。僕も医学部を目指す生徒たちを講師として指導する立場にある人間の一人ですが、実際に医学部の志望理由欄の記入や、面接の対策に頭を悩ませている受験生を見るにつけ、そのことを実感します。

● 「想像力」と、それを支える「土台」が、答えるためのカギ

しかし、必ずしもとまどう必要はありません。これらの問いに答えるためのカギは、人間なら誰もが持っている「想像力」にあります。

しかも、人間は年齢が浅いほど、むしろ枠にとられない豊かな想像力に恵まれています。それは経験や知識の量を補って、生きるための力として若い人間に備わっている、生命力の一部と言えるものかもしれません。そしてそのような豊かな想像力を十分に発揮すれば、たとえ人生経験が浅くても、冒頭の問いに答えることは決して難しいことはありません。

ただし気をつけなければならないのは、この場合「想像力」といっても、幼いころに無邪気にあれこれ空想をするのとは違って、筋道の通った理由をきちんと組み立てるために、その力を発揮することを求められるということです。

そのような想像力を発揮するために必要なものは何でしょうか。君たちはすでに、人間の頭脳が最も柔軟で、新しい知識を取り込みやすい時期に、学校で勉強を重ねてきているはずです。それは人生全体から

見れば決して多くはない時間でしようが、勉強の内容自体も、また勉強のために努力をしたという事実自体も、人生の土台となるものです。

その土台を踏まえた上で、筋道の通った想像力を発揮すれば、医師としての人生をどのように踏み出し、どのように歩んでいくのかという問いに対し、必ず質問者を納得させられる答えを出すことができるでしょう。

そのためにはまず、自分の「土台」をきちんと見つめ直す必要があります。

土台にひび割れがあれば補修し、欠けや抜けがあればそこに材料を詰め直し、補強をしなければならぬでしょう。さもなければいくら想像力を発揮して答えを組み立てようとしても、とんでもない方向に曲がったり、傾いたり、あるいは土台ごと崩れてしまうかもしれません。

● どのような「土台」が必要か

具体的には「医療」全体に対する関心や熱意と、それに基づいた知識、さらには医療の問題の背景ともなっている現在の社会状況についての認識が、この「土台」に相当するものと言えます。

ただし、もちろんそれは必ずしも専門的で詳細なものである必要はなく、また百科事典的なものでなく、いいのです。求められるのはあくまで君たちが受けてきたはずの教育や、学生としてこれまで過ごしてきた生活にふさわしいものでよいのです。

いきなり大きな天守閣のようなものをその上に築けるような、高く広く、強靱きわまりない土台を用意

する必要はありません。医療に関する専門的な知識はいずれ入学後に学んでいくものですし、社会情勢についても、一般的な報道で伝えられているおおよその現状と、その原因と考えられるものが何かを押さえれば十分と言えるでしょう。

もちろん何もかも全てを知る必要ありません。社会的に大きな話題となったものを見逃さなければ、基本的には大丈夫でしょう（実際に合格者の声の中には、面接のときによく知らない時事問題について質問された時は、素直に「よく知らない」と答えた方が、かえって面接官に好印象を与えるようだという意見がけっこう多く見られます）。

またその「土台」は、君たちそれぞれの個性が素直に反映されたものである方が望ましい、と言えます。「土台」のさらに下にある地盤は、個人それぞれの性格や価値観といったものです。そうしたものにふさわしくない土台を築こうとしても、やはり土台は丈夫なものにはならないでしょう。

● 自分を見つめ直せば、良い点は必ず見つかる

ここで恐らく、君たちの多くが疑問に思うだろうことは「自分の性格や価値観を素直に言ってしまうと『医師には向いていない』と見られるのではないか？」ということです。

結論から言うと、これも心配する必要のないことです。人間の性格や価値観というものは一面的なものでなく、両面的であったり多面的であったりするからです。わかりやすく言えば、自分では欠点と思えるものでも、必ず長所ととらえることもできるということです。

一例を挙げれば「自分はいつもグズグズしている」という自己認識は「自分はどんな時でも慌てず、慎重に物事を進めるタイプだ」というようにとらえ直すこともできるでしょう。自分を否定する見方を、自分を受け入れ、自分を肯定する見方へと変えていくわけです。

価値観についても同様です。少し極端な例かもしれませんが「医者になってお金儲けしたい」と思うのなら「医療で社会に貢献するという原則を守りつつ、事業としても十分採算が取れるようにしていきたい」という具合にとらえ直せば、現在問題になっている、国民の医療費負担の増大という問題にも対応した答えになるわけです。

いずれにせよ、自分の「土台」を見つめ直すという作業は、必然的に「自分自身」を見つめ直す、という作業になっていきます。ただし、これは決して簡単ではない作業です。時には自分のイヤな部分を見つめる勇気をふるい起こすことも必要です。

●採点者や面接官は、何をしようとしているのか

しかし自分の「イヤな部分」も、とらえ方を変えて見つめてみれば、君たちの「生」を支えているものでもあることに、きっと気づけるはずです。そうやって自己否定の見方を、自己受容、自己肯定へと切り替えていけば、やがて自分で自分を信頼できる感覚が得られていくことでしょう。それが「自信」というものなのです。

そして「自信」の感覚は、不思議なことですが、言葉にしなくても相手に伝わるものです。そして実は

それこそが、大学側で君たちを待ち受けている採点者や面接官など、可否を判定する人たちが求めているものなのです。

大学側は面接の場が、そのことを確かめる一番いい機会と考えているでしょう。文字通り面と向かって接してやりとりをするということは、大学側にとってその生徒の知識や論理性だけではなく、それを本当に自分のものとして使いこなせているかどうか、それを言葉の奥にある姿勢や態度から読み取ろうとしているのです。いわばこれまでの受験勉強の成果がどれだけ「自信」につながっているか、その感覚を受け取ろうとしているのです。

ですから仮に、ある問いに対して全く同じ言葉で答えた受験生が二人いたとして、一人は自信を持って答え、一人は自信なさげに答えたとしたらどうでしょう。君たちがもし面接官の立場なら、どちらを合格としますか。おそらく誰もが前者を選ぶのではないのでしょうか。そういう所に、それまでに本当に血肉となるような勉強をしてきているか、あるいはとにかく丸暗記でもかまわないやと思いつながら勉強してきているかが、一瞬であらわれてしまうのです。

冒頭に掲げた問いに対する答えにしてもそうです。模範的な答えを丸暗記してそのとおりに答えられるかどうかは、全くどうでもいいことなのです。たとえ不器用な言葉でも、それが「自信」にもとづいた答えであれば、合格は決して遠くはないでしょう。

● 医師としての未来へ

そして君たちを待ち受けている医療の世界は、もちろん非常に厳しくもありませんが、同時に非常に多様で広大であり、今後の可能性に満ちた世界です。大きな包容力を持った世界、とも言えるかもしれません。その中で君たちの性格や価値観、熱意を存分に活かせる場所を見つけることは、もしかしたら時間はかかるかもしれませんが、十分に可能はずです。

繰り返しになりますが、そのためにもしっかりと自分の「土台」と、その地盤となっている「自分自身」を見つめなおし、確かめ、その上でなるべくあらゆる角度からとらえ直しておくことです。それによって君たちのこれまでの人生の時間の何倍かに相当する「医師としての人生の時間」を、はつきりと思い描けるようになり、それを自信を持って語れるようになるでしょう。その内容、君たち自身の「自分の言葉」で語る内容こそが、冒頭の問いに対する確かな答えとなるのです。

僕はこの本で、そんな君たちの「土台」作りのヒントとなるような内容を、なるべく明快に説いていこうと思います。うまく役立てて「想像力」の発揮のきっかけにしてくれれば、僕としてそれにまさる喜びはありません。